

審査員総評

天野 太郎（東京オペラシティアートギャラリー チーフ・キュレーター）

ACY アーティスト・フェローシップ助成の2回目の審査に参加した。審査講評は、1回目の成果をもとにすることが出来たのは非常に参考になった。市内の幾つかの地点をレジデンスの対象としている点が特徴的なプログラムであり、それを十分に活かせた成果だったからだ。

今回も二次選考に残ったアーティストの提案は非常に幅広く、横浜の地域性を意識したものが多かった。この地域性を活かすことだが、ある意味で非常に抽象的な言い方にもなるのだが、地域の人々との協働もその内容に広い幅がある。モノとしての作品を最終的な成果とすることのみならず、あくまでも過程（work in progress）を経験し、継続的なプログラムとして地域に残していくという方法もある。また、提案するアーティストが、そのテーマの当事者である場合もあれば、言わば地域にやってきた漂泊の人という場合もある。それぞれ立場が異なるものの、アーティストと地域住民が日常の風景の中にそれぞれ新たな発見、気づきで結ばれていくことに変わりはない。

また、横浜に限ったことではないが、日本の都市は異文化を背景とした多様な人々の共生の時代を迎えつつある。無論、その背景には、少子高齢化に伴う地域社会の再構成が意図されているが、新たな住民のみならず、すでに世代を重ねている住民の歴史的、文化的背景の多様性も十分に意識すべき事柄だろう。今回は、こうした視点も十分に念頭にいれた提案が多く見られ、個々のプログラムを通じて、横浜の新たな様相が浮上することも大いに期待したいと感じた。

岡本 純子（公益財団法人セゾン文化財団 シニア・プログラム・オフィサー）

舞台芸術の有識者として2年目の審査員となった今回は、舞台芸術のアーティストを2名採択することを目標として審査に臨み、それがかなったことをとてもうれしく思っている。

一方、一次選考では、作品の独自性を最重視し、着実にレベルアップし続け、活動の場を広げ、客観的な評価も得て、助成すべきタイミングにある方を高く評価したが、大変残念ながら全員二次選考に進むことができなかった。

今回は審査基準に「【横浜での意義】横浜で滞在をしながら創作または発表することの意義を有しているか。」が加わったが、申請書から、「1.その点を意識し、かつ説得力を持つ内容となっている人」、「2.意識はされているが、十分な説得力があるとは言いがたい人」、「3.あまり意識されていないと思われる人」に分かれ、当然ながら、1. の人が高い評価を得る傾向にあった。

また、【提案内容】として、「ACY が指定する横浜市内の拠点での滞在（最短 6泊 7日）」「地域住民と交流する活動（公演、展覧会、試演会、ワークショップ、トークイベントなど）」が求められているため、実質的に、ACY アーティスト・フェローシップ助成=横浜での滞在制作および地域住民との交流、となったと言える。自らの創作上の関心を上手く助成内容に結びつけ、キャリアアップの機会とできる人向けの助成と言えよう。

自身の関心と横浜をすぐに結びつけるのが難しかったら、指定の滞在拠点や周辺地域をリサーチしてから提案内容を考えてみてもよいのではないか。5つの滞在拠点は、立地場所も拠点の個性も運営者の方々も様々なので、それらを踏まえて活動内容を考えれば、自ずと説得力ある内容になるのではないか。今回、採択に至らなかった方々にも、自らの視野やアイデアを広げる機会としても ACY アーティスト・フェローシップ助成を活用し、キャリアアップを図るべく、再度挑戦していただければと思う。

野上 絹代（振付家・演出家、多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科専任講師）

昨年度から審査員を務めておりますが、前回よりも助成金の趣旨を理解し、横浜市でレジデンスをする意義がしっかりとと考えられている方が多かったように思います。その点において、非常に悩ましい書類選考になりました。ただ、100名を超える作家の皆さんのお活動やコンセプトに触れる機会は私にとってとても貴重で、たくさんの刺激をいただき有意義な審査期間となりました。ご応募いただいた皆様、ありがとうございます。

舞台芸術ジャンルは作品コンセプトや自身の作家性を、説得力をもって自ら言葉にする機会が少ないからか、書類では良さが半分も伝わらないのでは、という方も見受けられました。その中にあって一次選考を通過された方々は舞台芸術以外の審査員にも伝わる独自性とレジデンスの意義を強く信じさせてくれる活動計画だったと思います。

二次選考で感じたのは書類とは受ける印象の違う方が多かったということです。この助成金はレジデンスを通じて市民との交流を経て、アーティストとしてのキャリアに活かしていくことを重要視するものです。ですので、面談時のやり取りから、アーティストとしての強さと柔軟性の両面を持っている方が結果的に助成対象に採択されたと感じました。

採択された5名の方の横浜市での活動に期待しています。また、今回採択に至らなかった方々も今一度、助成金の趣旨をご理解いただき、またご応募いただければと思います。

長谷川 新（インディペンデントキュレーター）

100件を超える応募書類を吟味することは未然の作品にひとつひとつ立ち会うようなとても貴重な経験でした。応募していただいた方々に心から感謝いたします。

講評に際して、大前提として書いておくべきだと思うのですが、この公募は求められる実践が数としても質としても高水準で、また多岐にわたるようになっています。言い換えれば、この予算と応募条件が、（例えば素材や、共同制作者の人数など）表現を規定する側面があるということです。また、作品の成熟や創作アイデアの発見を促すキャリアアップ支援という公募の性格もあり、少なくない応募者が計上可能である「企画料」を0円で計上していました。

高水準の調査（もはや単なる美術実践における貢献や作家個人の変容にとどまらず、学問的にも、ある種のアカデミア空間においても資するような社会実践）を伴う制作案がいくつもあり、結果としてそうした性質を持つ応募プランが全体において高い評価を得ています。今年はそこに賭けた、と私自身は考えています。いずれも、今回の滞在制作がとても楽しみですし、今回で終わらず、或いは今回をパイロットとして、より発展的に続いていってほしいなとも思っています。

応募プランの中には本当に魅力的なものがたくさんありました。横浜を使い倒すプランもあれば、ひとつの休憩地や経由地として横浜を捉え返すようなプランもあり、或いは横浜である必然性は薄いもののそれ自体が抗しがたい魅力を放つものもあり、分厚い地層に押しつぶされそうになるような感覚を覚えました。

おそらく試され、求められているのは審査員の側であり、制度の側であり、行政の側なのだと思います。高騰する物価、コミュニケーションを必須として立ち上がりていく設計、セルフプレゼンテーション能力、年齢や生活環境との折り合い。作家の多くはそうした点を言い訳にすることなく、ひとつの条件として受け止め、自分がやりたいことを言葉にし、数字にし、声にしていたと思います。運営する側もまた現在の条件の中でベストを尽くそうとされています。審査した側としては、採択された方々の実践を見ることを心から楽しみにするとともに、これからなされる出来事から何を汲み取り、自分が何を果たすのかを考えたいと思います。あらためてありがとうございました。

藤原 徹平（フジワラテッペイアーキテクツラボ代表、横浜国立大学大学院 Y-GSA 准教授）

ACY のフェローシップは、美術分野や舞台芸術分野、あるいはそのどちらとも言えないような多様なアーティストからの申請がある。昨年から対象年齢制限がなくなり、当然ながらすでに自分なりの方法論なり、キャリアを築かれている方からの応募が増えた。

すでにある程度キャリアがあるアーティストに対しては、このフェローシップでどのような変化を得ようとしているのかを重視して審査をした。また逆に、若手のアーティストには、このフェローシップで飛躍をしていくような転換点を求めるベクトルを期待した。

昨年度の成果発表では、横浜の郊外部の拠点でアーティストが滞在し、生活し、活動をする。そのことの可能性と面白さがよくわかった。薪で風呂を炊いたり、食事をしたり、話を聞いたり、なんてことない日々の行為から多様な化学反応が生まれていた。

その意味では今年の申請書の多くは、横浜での計画が真面目に練られ過ぎているように感じた。

横浜は、港町であり、国際都市であり、多国籍都市であり、広大な郊外部を抱えた現代社会の縮図であり、近代化の多様な歴史の層が重なる都市でもある。

リサーチなのか制作なのか上演なのか、あるいは創造的な思考のための逍遙の場なのか。アーティストの計画とは、もっと自由で感覚的なものであっても良いのかもしれない。審査をしていてそのように感じた。

審査員間で今年も充実した議論ができた、その結果、予測不能で面白い応答が起きそう。そのような期待感を持てる 5 人が選ばれたように思う。